平成２０年度

まちづくり講演会

共有、共感、そして共働・・・

『「共働」でマチをつくるということ』
～共感から共働へ～

国立大学法人九州大学ユーザーサイエンス機構
特任准教授　加留部貴行　氏

平成２０年６月１９日　木曜日
サザンクス筑後　小ホール

主催　筑後市

演題：『「共働」でマチをつくるということ』
～共感から共働へ～

講師：国立大学法人九州大学ユーザーサイエンス機構
特任准教授　加留部貴行　氏

講師プロフィール

1967(昭和42)年3月9日生。福岡県出身。1990年3月、九州大学法学部卒。同年4月、西部ガス（株）入社。人事部、北九州東支店、北九州事業総括に勤務後、2001年10月に西部ガス（株）から福岡市市民局コミュニティ推進部へＮＰＯ・ボランティア支援推進専門員として2年半派遣され、2004年4月に西部ガスに復帰。人事労政部ライフプラン支援室を経て、営業総括部、事業推進部事業開発室では指定管理者制度を担当。2007年1月に九州大学へ出向し、現在は、ユーザーサイエンス機構特任准教授として、ファシリテーションの導入を通じた大学の教育プログラム開発、2009年度に設置する新しい大学院「統合新領域学府」の設立準備を担当。

学生時代から大分県一村一品運動などのムラおこし・まちづくり活動に携わり、入社後も活動を継続。主に青年活動、国際交流、文化振興の分野で、広報、スタッフ人事、団体組織運営に関わる企画全般を担当。2000年5月、ＮＰＯふくおか理事・事務局長。2003年5月末まで常務理事。ＮＰＯを支え各セクターを結ぶ中間支援分野で活動しながら、現在は、ＮＰＯやボランティアをはじめとする市民公益活動全般や企業の社会貢献活動、行政の支援施策や市民との共働施策、職員研修プログラム立案などに対し、「産・学・官・民」での現場経験を活かしたアドバイスを行っている。

他に、（特活）日本ファシリテーション協会副会長、（特活）日本ボランティアコーディネーター協会運営委員をはじめ、福岡市地域活動アドバイザー、福岡県ＮＰＯ・ボランティアセンター協働推進協議会副会長、福津市行政評価委員会会長などの自治体付属機関委員や九州を中心として全国各地で講演や研修などの講師を務めている。

著書に『チーム・ビルディング―人と人を「つなぐ」技法』（ファシリテーション・スキルズ）（共著・日本経済新聞出版社）。趣味は演劇鑑賞、野球観戦、

筑後市のみなさまこんばんわ。

ただいまご紹介いただきました加留部と申します。今日は、どうぞよろしくお願いいたします。ご紹介のとおりでございまして、本業は西部ガスの社員でございますが、現在、九州大学に出向しており、いわゆる教員のような役割をやっております。学生時代から村おこし、まちづくりの世界に身をおきまして、それが、かれこれ２１年になってしまいました。趣味が高じたと申しましょうか、ご紹介にありましたように、福岡市役所に２年半ほど派遣され、公務員の立場でＮＰＯ・ボランティア、あるいはコミュニティ活動の支援に携わらせていただきました。その後、再び西部ガスに戻ったんですが、何の因果か、昨年の１月に九州大学に出向いたしまして、現在は来年度設立いたします新しい大学院の設置、特に教育プログラムの準備をするという立場にいます。気がつけば、企業の人間がＮＰＯやって、公務員をやって、今、大学におりますから、「一人産学官民連携」というのが、私の最近の自己紹介となっております。

今日いただきましたテーマ、『「共働」でマチをつくるということ』で、まちづくり講演会という筑後市にとっては大事な場にお招きいただきました。私の話が、どれくらいみなさまのお役にたつのかどうか、甚だどうかなと思うところもあるわけでございますが、私なりにこれまで経験してきたりとか、いろいろ見聞きしてきたことの中で、特に「一緒にやっていくこととはどういうことか」というお話を進めさせていただきます。

私がこの世界に身をおいて２０年あまりになったと申し上げましたが、それこそ、学生時代に「村おこしやってます」「ボランティアです」「地域で何かやってます」とか言っていたら、「何が楽しくてやってるの」と、よく言われてきたものでございます。これを称してなんというかというと「奇特な人」と言いまして、奇特の奇は奇妙の奇と書いて、特は特殊の特と書くわけでですけれども、要は「変なやつだ」と言われてきたわけです。ところが、あることをきっかけとして、随分イメージが変わって参りました。それは何だったかというと、９５年、平成７年に起こった阪神淡路大震災です。今年の１月１７日で、１３年になりました。今も四川の大地震があったり、つい１週間ちょっと前には、宮城、岩手でも地震がありました。さまざまなことが起こっていますが、私どもが、ある面、目を覚まさせられたのは、あの１３年前の阪神淡路大震災で

あったろうと思います。

目を覚まさせられたというのは、大きく二つの「気づき」があったという話をいつもさせてもらっています。それは、表の「気づき」と裏の「気づき」でありました。表の「気づき」というのは何だったか。あのとき全国から「ボランティア」と名のつく人たちが、地元の人たちもあわせて、押し寄せるように、あの阪神淡路の現場にやってまいりました。その方たちの活動の模様が、連日連夜テレビや新聞、雑誌を通じて全国に配信されていきました。特にテレビの影響は非常に大きく、あのとき映し出された「ボランティア」と名のつく人たちの姿を見て、日本全国驚いたわけです。それまで、およそ「ボランティア」というのは、地域でお母さんたちが中心となって福祉をやっているのが一般的な見られ方だったんです。ところが、そこに映し出された方はぜんぜん違う人が多かったわけなんですね。例えば、お父さんが仕事休んで来ているとか、茶髪のおねえちゃんがいるとか、ピアスしたお兄ちゃんがいるとか、見た目だけで言っては悪いのですが、「こういう人たちもやってるの」と驚かされ、「これは、ほっとかれん」と言って、現地に行く人もいました。救援物資を送る人もいました。せめて募金ぐらいしようという人もいました。いろんな人たちの気持ちが、あの阪神淡路の現場に折り重なっていったわけです。「まだまだ日本という国は捨てたもんじゃない」と気づかされたのが表の「気づき」でありました。

毎年、当時の経済企画庁、現在の総務省というところが、家計に占める寄付金額の平均、１所帯あたりどれくらいの寄附をしてるか、みなさんでいったら、赤い羽根だとか、歳末助け合いだとか、今度あります２４時間テレビとかに、どれくらい出しますかという平均を出すんですが、日本は平均的に２，０００円から３，０００円が相場だったんです。ところが、あの年だけ５，０００円を超えたんです。ということは、どれくらいの人たちの気持ちが実際に動いたのかということで気づかされたんです。と同時に、後でボディブローのように効いてきたのが、裏の「気づき」というやつでした。

あの阪神淡路の現場において、いろんなことが起こって、いろんなことが後で検証されて揶揄されたことがあったんですが、その中の一つに、「行政が動かなかった」ということがあったわけですね。よくよく考えてみますと、神戸市役所の職員も、兵庫県庁の職員も、他の市町村職員も、みなさん当事者、つまり被災者であったにも関わらず、その日の朝は、サボることなく、ちゃんと役所、役場に行ってお仕事をされてたんです。公務員の方の献身的な動きというのは、大変なものでして、後でＰＴＳＤだとか、精神的に病んで、後遺症を引きずっている方がたくさん出たというくらいに、本当に、一回出たら家には戻れないという状態で仕事をされてた方がいっぱいいらっしゃったんです。そういう状態であったにも関わらず、「動かなかった」と言われてたわけなんです。

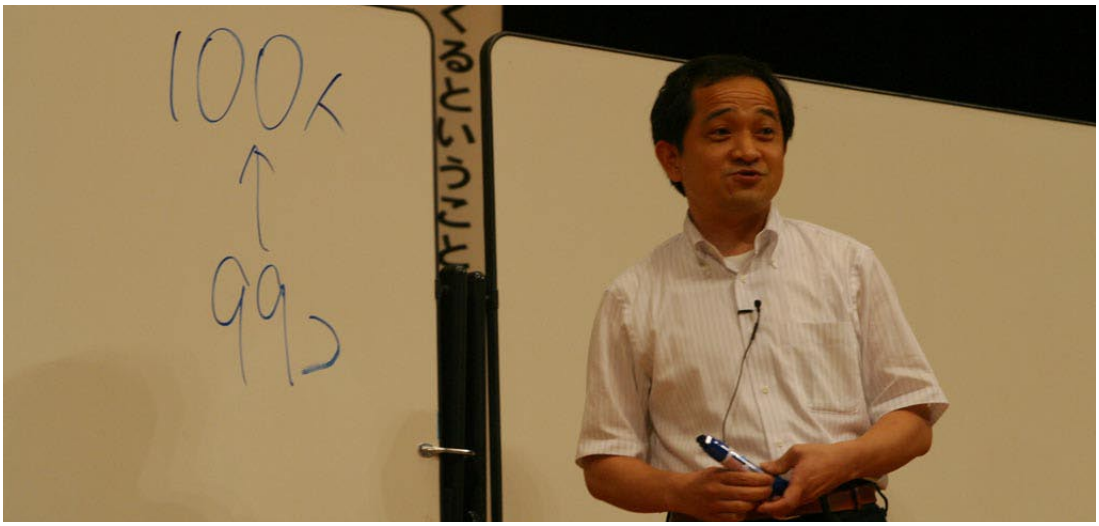
では、いったい彼ら、彼女らは何をやっていたのかということなんです。あの時、行政の方たちは、まず公平公正に仕事をしなければならないと考えたわけですね。ですから、彼ら、彼女らがやっていたことは、いったい何であったかというと、全体の状況の把握ということなんです。いったい何が起こってて、どんなことにみなさんが困っていて、何をしたら良いかということを考えていくわけですよ。ところが、平時の時に一部の具合が悪いことを把握するのは簡単なんですが、みんな揺れて大事だというときに、全体の状況を把握するのが、どれくらい大変なことかと、ちょっと想像してみていただきたいと思います。あの四川の大地震、いろんな数字が出てきてますけども、ものすごくアバウトな数字なんです。まだ、全体の状況なんて把握されてません。起こってからかなり時間がたってますけども。阪神淡路でさえ、後になっての話ですが、

あのときの被災者、特に亡くなった方の人数が確定するまで、何年もかかってるんです。つまり、本当の意味で全体の状況を把握しようとしたら、とてつもない時間がかかるんです。それをやろうとしました。そして、だいたいこんなことが起こってるというのが分かります。「じゃ、こんなことやらなければいかん」といういくつかの案が出ます。案が出たらそれを、縦割りの世界よろしく、役割分担して「あれは福祉課、これは道路」いろんなところで役割分担して動こうとするんです。動こうとすると次になんと言うかというと、「ちょっとまて、動くのは良いけども、住民の過半数の同意をとらなければ」とか「議会に一言とおさなければ」とか、いろんな手続きをとり始めたんですね。そうすると時間だけがどんどんたっていったんです。とりあえず、神戸市役所の周り半径 500 メートルの人を救いなさいというのは、人情ではありますけども、501 メートルのところの人から「私はどうなるの」と文句をいわれて困ってしまうのが役所ということろなんです。つまり、行政は、その仕組みがゆえに、「動かなかった」のではなく、「動けなかった」状況があったんですね。ところが、民間の、ボランティアと名のつく、住民を含めた方たちは、そんなことお構いなしに、自分ができると思ったことを、目の前にいる人たちに対して、自己責任の範囲の中で、思いつくがままに、不公平にやることができたわけなんです。

不公平にやってはいけないと思うかもしれませんが、我々の生活の中に不公平はいっぱいあります。最たるものは家族をつくるということです。特定の人と特定の関係を結ぶから成り立つ話であって、不特定の人と公平にやってたら大事になるわけですよ。「あんただけよ」となるからやさしくあたたかいものになるわけであって、「みんなのために」とか「全体のために」といったら、格好はいいんですが、ともすれば、冷たく薄いものになってしまう危険性をはらんでいるということに気づかされていったわけなんですね。

あの時、いろいろな検証が行われました。これだけ行政と民間で違うという話が分かってきたんです。例えば１００人のの被災者がいたとしましょう。そこにあちこちから９９個の救援物資、例えば、お弁当がきた、今から一昼夜おいていたら、腐ってしまうかもしれないというお弁当が届いたとしましょう。役所はどうするか。９９個のお弁当がきてますが、９９個のお弁当は配れないんです。何故か。1 人不公平な人が出てしまうんです。「あの人どうするの」と言われたら困ってしまうんです。行政というのはみんなの為にやる立場だということだから、そこに付託をして、税金を預けて、やってくださいとなっているわけで、その立場を忠実に守ったら、こういう動きをせざるを得ないんです。では、民間はどうするかというと、９９個の救援物資がきたら、まず、９９個配るんです。あと 1 人に「がまんして」といってもゆるされる立場にいるんです。普通の平時には、こういうことは気がつかなかったんですが、非常事態になって、みんなが一斉にいろんな動きをしたときに、「こういう仕組みだったから、具合が悪かった」ということに気づかされたんです。そこで、その「ボランティア」というものの存在に、強く気づいたんです。

ボランティアという活動、あるいは、住民たちの自発的な活動がどんな特徴をもっていたかというと、まず、大変多様多彩であったということです。「思いつき、思い込み、思い上がり」と後で言われたくらいに、とにかく自分ができそうだということは何でもやったわけですね。例えば、ばあちゃんが動けんといったら、運び出そうとした人もいたし、瓦礫の山の中で犬



が、猫が鳴いていたら掘り起こして助けようという人もいました。全国から来た救援物資を荷解きして配る人もいれば、その隣で炊きだしをするお母さんもいました。「私たちはこんなことしかできなくて申し訳ない」と言いながら、亡くなった方を弔うためにお経を上げていったお坊さんたちのグループもいたというように、とにかく、ここで私たちが何ができるんだと、みなさんが動いたということなんです。そしてさらに、そのスピードが速かったというんです。あの時、いろんなことが起こったんですが、その中に、アトピーのお子さんたちを抱える、お母さんグループが被災され、日頃の暮らしの中では、自分の子どもにとっては「あそこは無農薬で」「あそこのお弁当を届けてもらおう」とかいうのがあったんですが、全部被災してしまいました。「明日からの食事どうしよう」と思っていたところに、同じ悩みを持つ全国のお母さんグループから、その日のうち、あるいは翌日には、食材やお弁当がいろんな形で届いたというんです。悪いけれども、これは、役所ではできないです。つまり、行政の限界点を越えるところを、民間のボランティアあるいは、地域の住民がやってしまったわけなんです。

何でこういう人たちの動きを気づいてなかったのか、もう少し何かできないかといってできた法律で、９８年１２月１日から施行されたのが、特定非営利活動促進法、俗に言うＮＰＯ法という法律であります。今年が２００８年ですから、ＮＰＯ法施行から今年が満１０年の年にあたります。おそらく、もうそろそろ、「ＮＰＯの光と影」とか、「ボランティアの今」といった、いろんな特集記事が組まれるのではないかと予想しているところもありますが、このＮＰＯ法という法律ができまして、たくさんの方たち、今まで全く地域の活動、あるいは、ボランティアの活動に興味をもたなかった方々がこの世界に身をおくようになってまいりました。現在、このＮＰＯ法という法律に基づいて、ＮＰＯ法人という法人格を取得している団体は、全国で３万４千を超えようとしています。これは大変な数字でございます。民法３４条に公益法人といって、財団法人、社団法人の規定があるんですが、全国でこの２つを併せて２万６千なんです。しかし、それをわずか１０年で超えてしまったというくらいの勢いがあります。要は、作りやすかったということが原因であるんですけども、そいう法律ができたおかげで、新聞を広げれば、どこかに何かの活動が紹介されたり、いろいろな事象がみなさまの目に届くというように、「ボランティア」という言葉もお茶の間に届くようになってまいりました。「まちづくり」とか「村おこし」だとかいう言葉も、随分昔からありましたけれども、より「まちづくり」というものの主体に対して、地域住民が関わっていく、あるいはボランティアだとか、ＮＰＯだとかというものが関わっていくということも、知れられるようになってまいりました。おかげで、だいぶイメージが変わってきました。奇妙で特殊であった我々の世界は、「ボランティアやってます」「地域の活動やってます」というと「それは立派なことで」と貴重の貴に変わり、特殊の特でやっていたものも、人徳の徳に変わるくらい、こんな言葉は辞書には載っておりませんが、随分イメージは変わって参りました。ただ、気をつけなければならないのは、同じキトクでも、既得権のキトクになったり、「最近、筑後市のボランティアはご危篤でございます」と言われないようには頑張らないといけないところもあると思いますが、随分イメージは変わってまいりました。

しかし、イメージが変わってお茶の間に届くようになった分だけ、逆に問題というか、課題が発生いたしました。それは何かというと、「ボランティア」だとか、「ＮＰＯ」だとかという言葉、あるいは、「まちづくり」だとかいう言葉に対する捉え方、あるいは、それに対する感じ方も大変多様多彩になってきたということです。今日は、良い機会でございますので、もう一度、そもそもの話を今からさせていただきたいと思います。いったい私たちは、なぜこんなことをやっているのか、そして、どういう立場にたって、いったい何ができて、何ができないのかということを、いまから紐解いていきたいなと思っております。

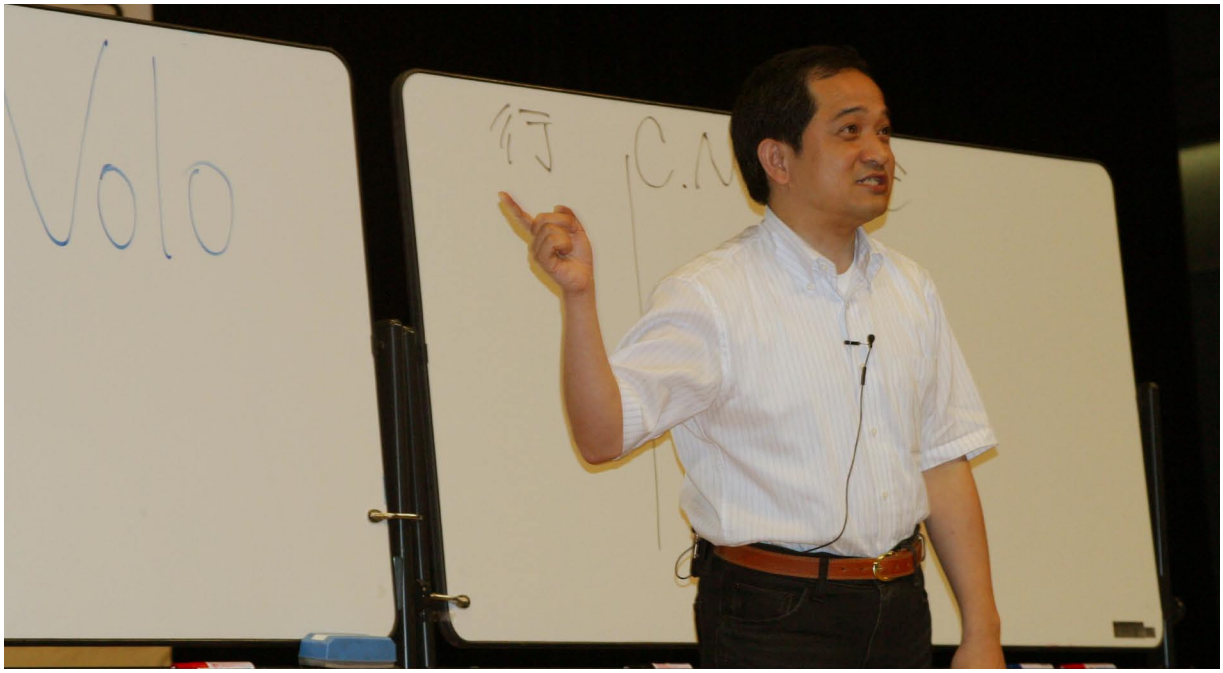
立場の違いを見るということで、行政と、ボランティア、ＮＰＯ、コミュニティ、企業をおきます。「ボランティア」という言葉は、ラテン語に「ボランタス」という言葉がありまして、その意味は、「自発的にする」という意味です。さらに「ボランタス」の言葉のもとの言葉には「ウォロ」というのがありまして、「喜んで何かをする」という意味を持っています。そして、この「ウォロ」という動詞には、大変面白い性格を持っていまして、普通、動詞には命令形というのがあるのですが、「喜んで何かをする」というこの動詞には命令形はありません。つまり、喜んで何かをしろという言葉はないんです。つまり、自分からやることなんです。誰かから言われてやることじゃないということなんです。だから、これを元にしている「ボランタス」という言葉に、自発的にするという意味があります。では、自発的にするとはどういうことかというと、大

きく４つありまして、やりたいことをやる、やりたくないことはやらない、言われなくてもするけれども、いわれてもしない。要はやるかやらないか自分自身で決めることなんです。だから、自分が全てのよりどころになります。

ボランティア活動なんて、いつ始まって、いつ終わってるのかはその人次第です。きっかけは何でも良いんですよ。私は、どんなに不純な動機であっても良いと思っているくらいです。大事なのは、そこで何をやっているかなんです。２００１年に福岡市で世界水泳大会というのがありました。あのとき、福岡市がボランティアの募集をし、たくさんの人が応募したんです。応募した方たちのお話を後で聞いたら、ほとんどの方といったら言い過ぎですが、かなりの人が「イアンソープに会えるかもしれない」だったんです。別に、福岡市役所はイアンソープに会えますよとは、一言もいってはいないんですが、本人たちの思い込みですよ。でも、大事なのは、そんなことではないんです。あのときイアンソープが世界新記録をどんどん出しました。それくらい選手たちが最大限の力を発揮できるような大会運営に、どれだけみんなが力をあわせて寄与できたか、これが大事だったんです。そのために通訳をする方がいたり、安全確認をする方がいたり、誘導係をする人がいたり、いろんな役割分担をやっていたわけなんです。これが大事なんです。逆が困るんです。世界のため、、水泳のためと言いながら、現場で動かないというのが、一番具合の悪い方たちでございます。いろんなタイプの方がいるので、一概には言えませんが、「ボランティア」という言葉は、もともと「喜んで何かをする」命令形がない言葉「ウォロ」というのが語源であるというのを頭に留めておいていただきたいと思います。

自発的にするということを元にもつ、この「ボランティア」という言葉を、時々奉仕活動と訳される方もいらっしゃいます。確かに「誰かの為に」という奉仕という言葉もあります。奉仕というのは、奉り仕えると書きまして、誰かの為に、何かの為に、自分の欲を押し殺して、我慢しながら何かをやるという意味合いをどこかに残しているんです。しかし、「自発的に」というのは、ほっとけないとか、どげんかせんといかん、とかいうふうに、我慢してやるんではなくて、我慢できなくて動き出すという、そういう思いから始まる話なんですね。誰かの為にという奉仕という意味合いは残りますが、自発的な力なんだということを知っておいていただければと思います。

ちょっとくどいようなんですが、この自発性というのは大変おもしろい性格を持っていまして、自発性を誘発するのは自発性です。これはどういうことかというと、こういう活動とかに参加する方たちのきっかけというのは、ほとんどの方が、もちろん自分から手を挙げたのもありますが、かなりのきっかけは、「誰かから誘われた」です。つまり、誰かが誘うという自発性で、それに誘発されて「なら俺もやろうか」という形でスタートしていくという連鎖を持ちます。そして、活動を始めて、続けていきますが、時々疲れませんか。私も、２０年もやっていると、結構疲れてきますけどね。先ほど、表彰を受けられていた方がいらっしゃいましたが、結構疲れるときもありませんでしたか。紆



余曲折あって疲れる、疲れたら休みたくなるでしょう。休もうとするときに限って、誰かが何かをお願いしにくるんですよ。そういうとき、「すいません、休ませてください」というときに限って、「だからボランティアはあてにならん」とか言われるんですね。その言葉に「じゃあやります」といって頑張って、疲れて、こういったことを２周も３周もする方がいるんですが、そうは言いながら、この自発性を励ますのも自発性なんです。例えばどういうことか。「もう疲れたけど、あの人はまだ頑張ってらっしゃる」とか、やっている姿に励まされたり、今日の表彰のような場で、みなさまから感謝されたりすることが、「もうちょっとやろうか」という気持ちにつながっていくんです。自発性というのは、誘発されるのも自発性であり、そして、励まされるのも自発性です。ですから、筑後市でも、まちづくりとかボランティアとか、言い方はともかくとして、お互いに声かけあうとか、そういうところの連鎖が、実は、このまちづくりの、とっても大事な基盤になると思っています。今日は、また後で、称えあう意味で拍手を送りあっていただければなと感じるところでもあります。

そういうボランティアなんですが、これは、あくまで個人なんです。あるいは、個人が活動している様を指すんですね。あの阪神淡路の現場に戻りますけれども、全国からボランティアが来てもらったのはありがたいんですが、言っては悪いんですが、個人がばらばらに来ているだけなんです。個人がばらばら来ているだけだったら、烏合の衆なんです。じゃ、１人で全ての荷解きをして、配って、なんでもできるかというと、それは無理があります。では、そのときに必要なのはいったいなんでしょう。仲間です。１人より２人、２人より３人、５人、１０人と増えればいろんなことができるようになります。そして、仲間が集うとどういうことが生まれるか、役割分担というのが出てくるんですね。例えばＡさんが荷解きして、Ｂさんが配って、Ｃさんが整理してというふうに、役割分担が生まれるんです。そして、やり始めると、「私も仲間にいれて」と声かけてくる人が出てきます。そしたら、「誰にお断りをとればいいんですか」ということに答える人が出てくるんですね。こういう人たちのことを称して、リーダーあるいは責任者と言います。そして、それが１日、２日の話ならばいいんですが、５日経ち、１０日経ちとなってくると、お金はどうする、場所はどうする、ルールはどうするといったお話合いが始まってくるんです。すると、最初はばらばらで烏合の衆のようだった人たちが、段々と組織だってきます。この組織を称してＮＰＯと呼んでます。ボランティアはあくまで個人ですが、ＮＰＯは組織であります。

Non Profit Organization の頭文字をとってＮＰＯと言ってまして、英語ですから、日本語に訳しますと、民間非営利組織となります。わざわざ頭に民間とつけているということは、民間ではない非営利組織があります。それは何かというと役所です。これは後で話します。もう一つあるのが、まさにみなさま方の立場、コミュニティ、地域で活動しているいわゆる地縁団体、町内会、自治会、マンションの管理組合などからはじまる活動です。あるエリアがあって、そのエリアの中で問題解決をしたり、みんなで合意をとっていったり、一緒に何かやっていきましょうということのお世話役をしたりとった方の活動のことを、コミュニティの活動と呼んでます。ここ（ボランティアとＮＰＯとコミュニティの活動）は、市民の方が主体になっているということで、多少温度差はありますが、一応ひとつのものとして考えさせていただきたいと思います。そういう前提のもとで、行政と私どもの活動というのは、先ほど言いました「非営利」というところで同じ仲間なんです。非営利とは何かというと、営利を目的にしないということです。では営利を目的にしないのだったら、何を目的にするのかというと、自分たちがやりたいこと、自分たちが実現したいことをやったり、実現したり、達成することを目的としてます。非営利とは、別の言い方をすれば、こんな言い方もあります。「非営利とは、稼いでいい、儲けてもいい、利益を出してもいい、ただ、出た利益を全額本来の目的に再投資をしなさい」という考え方です。そういうことでいうくと、例えば行政も同じ非営利仲間なんですね。筑後市が平成１９年度の決算をだしました。仮に１億の黒字が出たとしましょう。じゃあ、その１億の黒字を全部筑後市民にお返ししてるかといったら、そういうわけじゃないですね。全部それは、明日の筑後市のために、筑後市が存在する、筑後市役所が存在する本来の目的である「筑後市を良いマチ」にするために、使い方は福祉であったり、道路の建設であったり、防災であったりと、いろいろありますが、そのマチを良くするためにという目的に対して再投資をしているという意味では、同じ非営利仲間であります。時折、非営利だからタダだとか、霞食って生きてるなんて言い方をする方がいますが、では筑後市役所の職員の方たちが霞食って生きてるかというと、そういうわけじゃないです。ちゃんと給料をもらって、まもなく

ボーナスをもらって、年金もあってといろいろありますよ。ＮＰＯの中でも、例えばＮＰＯ法人で法人格を取得しているところでも、フルタイムで人を雇用し、それに対して給料を払い、社会保険を完備して、ものによってはボーナスが出るということは、その支払い能力さえあれば、ちゃんとあります。これは、事実としてちゃんとあります。具合がよければ例えば１０人雇用してるんだけど、具合が悪くなったら３人ですよとか、正職員ではもたないからパートに切り替えなければいけないとかいうのは、企業と同じような発想で支払い能力に応じてやっているだけであります。非営利だからタダだというわけでもない、あくまでタダと言っているのは、先立つものが必要だという意味で申し上げております。今度は企業と私たちは、非政府、政府と政府ではない、平たく言えば民間という立場で言われています。民間で非営利で個人でやっているのがボランティア、民間、非営利で組織でやっているのがＮＰＯ、民間非営利で地域でやっているのがコミュニティの活動、そんなふうに見ていただければと思います。

これからが大事な話です。これら３つ（ボランティア・ＮＰＯ・コミュニティ、企業、行政）の領域、これをセクターと呼びますが、３つの領域がそれぞれに、何か大事なことを意思決定するとき、何か大事な事を決めるときに、最後のとどのつまりはいったい何を基準にして考えるかということです。これがぜんぜん違います。まず、行政は、最後の最後、決めるのは公平性です。みんなのためなら出来るけど、あなた１人のためならば動けないという世界です。ですから、行政の方が仕事をするにあたって欲しがるのは、住民の総意であったり、数であります。ですから住民の過半数の同意であるところの議会の役割というのが、そういうところに出てくるわけなんですね。公平性の担保、これが一番重要なところです。企業、これは分かりやすいですね。収益です。儲かるか儲からないかです。儲かるならやるけれども、儲からないならやらないです。どんなに良いことであっても、儲からないならやりません。どんなに悪いことであると言われても、儲かるならやっちゃうかも知れないというくらいに、わかりやすい世界であります。では、私たちは何でしょう。最後の最後の決め手は。さっきから言っている自発性です。「やりたいか、やりたくないか」です。ですから、私たちは民間で非営利で、自発性に支えられているんだということをご確認いただければと思います。

公平性を担保しなければいけない行政というところと、それに対して民間チーム、私たちは不公平であって結構ということです。民間の最大の強みはメリハリをつけることができるということです。ある面、筑後市役所、市長さんは大変ですよ。とにかく、筑後市で起こることは、おじいちゃんおばあちゃんのことから、子どものこと、山のことから川のことから、田んぼのことから、農業、商業、工業、ありとあらゆることをとりあえず受けるんですね、住民ニーズというものを。そして、それを「縦割り」といってますが、役割分担をしているんです。ところが、我々の活動はどうですか。子育て支援だけとか、環境だけとか、この地域だけをまず私たちはやっているんだとかいうふうに、非常に限定的であります。大変メリハリをつけることができます。「これだけ」やるんだということができるんですね。ですから、別の言い方をすれば、比較対照をしてみた場合に、より分野に対する専門性をもってたり、例えば地域に対しての定点観測をしている立場でもあります。この道１０年、２０年、３０年、三代住んで５０年とかという、そういう世界が展開されるんですね。かたや行政はちょっとつらいところがありますね。３年から５年で人事異動で入れ替わっていくじゃないですか。役所の方の人事異動というのは結構大変で、民間で言ったら転職に転職を重ねるようなものなんですね。例えば、道路をつくっていた人が次は子育て支援とか、環境やってた人が次は農業をやらなければいけないとか、ぜんぜん違うところに行かなければいけないんです。ところが、こちらは環境のことはまかせろというくらいにやっているわけで、さらに細かく、あんたは土で私は水、おまえはトンボで私はめだかというくらいに、どんなに細かいところに入っていってもオッケーな世界なんです。それくらい違いがありますので、場合によっては分からないことがあったら、こっちに聞いたらというふうに思うのが私の考え方でもあります。

こんどはこっち、儲かるか儲からないかで決める企業と、そうではない非営利チーム。非営利チームの考え方は、先立つものは必要ですが、儲かるとか、儲からないじゃなくて、やらなければならない、ほっとけないと思う人たちは、持ち出しでもしますよという考えを持つのがこの方たちです。ボランティアというのは、持ち出しの権化のような人たちでありまして、時間は持ち出す、金は持ち出す、体力持ち出す、気持ち持ち出す、人生まで持ち出す人もいますね。我々の世界で時々言われますが、「世界の平和は家庭の不和」

という有名な言葉があって、やりすぎるとちょっと具合が悪いという話があるくらいです。行政のやっている仕事の中でも、持ち出しの世界というのがあるんですね。例えば、道路つくるだとか、橋かけるとか、公民館建てるとかいう世界です。それ自体は儲かりません、道路をつくっても、それ自体はお金を生まない。ただ、なければ買い物にもいけないし、救急搬送もできないし、新幹線が来ても観光ができないしということになったら具合が悪いじゃないですか。だから、市民みんなの持ち出しとしての税金を使って、道路を整備しましょうとか、物を建てましょうとかいうことをやっている、公共事業なんてのは、そういう意味でみんなの持ち出し事業だというふうに思っていただければよろしいかなと思います。今度はここ。我々は自発性ですから、やりたくてやっている人たちと、そうではないこの２つ（行政、企業）。この２つは、やりたくなくても、しなければならないという世界があるお仕事。

で、これを長々とお話ししたのは、それぞれに特徴や特性があるということなんです。やっていいこと、やってはいけないこと、できること、できないこと、得意なこと、不得意なことがありまして、できることとか、得意なこととか、やっていいことは、どんどんやればいいのですが、問題は、不得意なこと、できないこと、やってはいけないことをやらなければならなくなったときに、どこと組むか、誰と組むかということを考えなければいけなくなってしまったわけなんです。それはいろんな理由があります。これまで、およそ公共サービスと言われるものは、大概、この行政でなんとかまかなってた時期がありました。ところが今、行政はとてもじゃないけど、みなさまがた筑後市民の住民ニーズに全てに等しく同じように公平性を担保しながら答えるわけにはいかなくなってしまいました。それはなぜか、理由はたった一つです。非常にみなさま方のニーズが多様化してきたということです。言ってしまえば「私はどうなるの」と聞かれるようなケースが非常に多くなったということです。「この場合は」「この場合は」という場合分けも非常に細かくなってきたということです。ですから、みんなが思うんだったら動くんだけど、少人数だったら動けないという案件のほうが、むしろたくさん上がってくるようになってきたんです。言ってみれば、マイノリティの話のほうが、たくさん案件としてあがってきて、ここ（行政）では、なかなかカバーしきれないんです。その部分を企業が結構カバーしてきてくれている部分があります。少なくともニーズ、ご要望がありますので、そこを何とか商売にしようなんて考えてやってくれる部分もあります。ただ、この人たち（企業）は儲からないと思ったら撤収するんですよ。どんなにマチに必要だと言われてても、儲からないとなったらスパーマーケットは無くなっちゃうんです。そういう世界があるんです。そこを住民パワーでかなりカバーしてたり、頑張っている部分もあります。あるんだけれども、ここの世界はもともとのスタートラインが個人からスタートしてきているので、どうしても事務をするとかお金の計算をするとか、文書を書くとかいうことはちょっと苦手でございまして、そして、いろんな人がたくさん入ってくるものですから、合意をとるのがとっても難しくて、なかなか前に進みにくいという部分もあるんです。ちょっと組織として弱いというところですね。その点、行政だとか、企業だとかいうのは、そういうことの権化みたいなもんですから、非常にそのことに長けている。このように、いろいろなご要望や、お申し出事項が出たところで、パーフェクトに、ここだけあれば大丈夫という領域がなくなったということなんですね。ですから、どこと組もうか、誰と組もうかということを考え始めて、今日のお題であります「共働」という話が出てまいりました。「一緒にやろうや」という話です。後でちょっと触れますが、一般的には共働は協力の協を書きますが、私はこの共の字を使ってお話を進めさせていただきます。意味合いは後ほど後半でお話します。

一緒にやりましょうという話になってきました。特にこの２つ、行政とこの住民側が一緒にやりましょうと考えるようになってまいりました。やっている内容は、多少メリハリの違いはあるけど、どうも同じ方向に向いているみたいだということに気がつきはじめました。例えば、目の不自由な方たちに対して、点字に訳していくボランティア活動、点訳ボランティアというのがあります。例えば、公立の図書館で訳す活動では、だいたいみなさんの為になりそうなものを訳しはじめます。例えば市報だとか、世界文学全集とか、そういうみなさんのためになりそうで、あたりさわりのないというか、そういうところから訳しはじめます。ところが街中のボランティアグループというのは、その人が「これ読みたい」というやつですね、筑後市の歴史が知りたいとか、食べ歩きの本を読みたいとかいったら、それをちゃんと訳してくれるわけです。そういうメリハリの利かせ方の差はあれども、両方とも、

目の不自由な人たちに対して、その情報バリアを取り払うという意味では、双方に公益性をもちます。そこで最近言われているのが、先ほどのNon　Profit Organizationもｎｐｏなんですが、最近言われているのが、New　Public　Organization　新しい公益の主体、みなさまがたの資料レジュメでいきますと、８ページの下から２行目のところに書いている言葉です。こういう言葉を使い始めたわけなんです。大事なのは、この真ん中にある　Publicという言葉なんです。これはどういう意味があるかというと、「開かれた」という意味を持ってます。ゴルフされる方、パブリックコースというのがありますが、あれは会員でなくても使ってよいということですし、居酒屋でパブとありますけども、あれは北欧の文化で、家々からパンとかワインとか持って開かれた場所、例えば広場だとか、公園だとかに繰り出していってワーワーやっている姿をパブと呼んでいるんですね。どういうことか。いまでこそ、私たちの暮らしの中では当たり前のようになっている概念、あるいは、当たり前のようになっているサービスも、昔、それこそ５年前、１０年前、２０年前、３０年前には、まだまだ少数派であったことがあったんです。そのときに最初に言い出したのは、たった一人だったかも知れないんですね。「私のつぶやき」「私の悩み」「私の困りごと」だったかも知れないんです。ところが、その人が隣の人に話し始めます「私こんなことで困っててね」「そう、私も困ってた」「私も」「あの人も」といって、閉じられた世界が開かれた世界になっていって、「私の問題」が「私たちの問題」に変わったとたんにどこが動き始めるかというと、行政です。そこで新しい制度ができたり、法律ができたり、仕組みができたり、予算がついたり、あるいは行政の組織が変わったりとか、そういうことが変わっていったんです。例えばどういうことか、車イスで生活をされていた人たちが、外出をしたい、お買い物に行きたい、ちょっと外出を支援することで、何かお手伝いをしてもらえないだろうかと福祉事務所に電話を入れます。そうすると何と言われていたかというと「それは、あなたのプライベートの問題」言われていたことがあったんですね、昔。ところが、よくよく考えてみますと、外出して買い物に行くというのは、健常者であろうが身障者であろうが関係なく、普通の生活をするために必要な行為であります。そして、それは、その方だけの問題ではなく、他のあるＢさんも、Ｃさんも、Ｄさんも同じ車イスの方たちも同じことだったんだということに気がついて、できたサービスに移送サービスというやつがあります。今、車イスを積んで、あちこちに出て回る車なんかもでてきましたが、外出支援をするサービスというのがうまれてまいりました。そういう方たちがマチにでます。マチに出ると次に必ず出てくるのは段差の問題です。最初、段差の問題は、車イスの問題かと思っていました。ところが、後々よく話を聞いていくと、じいちゃんばあちゃんにとってもつらい、子どもにとってもつらい、ベビーカーを押すおかあちゃんにとってもつらいということが分かって出来た発想がバリアフリーです。そのおかあちゃんたち、筑後市にも年に何組か入ってくるでしょう。けれどもお友達もいません、乳飲み子を抱えていました。誰にも相談することなく、悩み苦しんでついつい子どもに手が挙がって、とかいう経験を話すと、「それは、あなただけじゃないのよ」と全国つながって、いまや日本全国子育て支援です。５年前、１０年前、２０年前にこういう発想はありましたでしょうか。つまり、最初はマイノリティであったかもしれないけれども、最初はごくごく少数の「あなた」の問題だったかもしれないけど、おしゃべりをして、共感をしてつながっていくことによって、「私の問題」が「私たちの問題」になってくると、地域全体、あるいは国全体の問題に変わっていったんです。ということは、どういうことかというと、また思いをはせていただきたいんですが、今でこそ、今、この瞬間はマイノリティな話かも知れないけれども、５年後、１０年後、２０年後にはとんでもないことになってるかもしれないということもあるかもしれないわけなんです。その第一報を寄せている人はいったいどういう人たちかというと、地域で活動している方たちであったり、あるいはボランティアとして、いろんなテーマに取り組んでいる方たちであったり、そういう人たちなんです。ですから、日本ＮＰＯセンターというところの山岡義典さんという方がいらっしゃいますが、彼の言葉を借りれば、ＮＰＯだとか、ボランティアだとか、あるいは場合によっては地域の活動というのは、「社会における火災報知器である」という言い方をするんです。最初はボヤがくるんです。煙みたいなのが立つんです。それでも火災報知器はワーと言うんです。でも行政からすると、「あんなのは、ボヤ、消えるかもしれない」「われわれは全体のことを考えないといけない」「一部のことには動けない」と思うわけですよ。でも段々火の手が上がってきます。これは大事となったら初めて動き出すんですね。これをマスコミではなんて書かれるかというと「後手後手にまわる」と書かれるんです。でも、

本人たちは不本意ながら、一部に動いていたら大変なことになりますので、そういうことをせざるを得ない部分もあるんですね。ともかく、第一報を寄せているのは現場にいる市民なんです。「今の筑後市は具合が悪い」とか「こういうことでは将来大変かも知れない」とか、「このことはどうにかしないと」と、実はテーマを一番持っているのは、住民側なんです。それを役所が時々取り上げて、ある程度の条件が揃っていってから動き始めるというところがあるわけなんです。つまり、どういうことか、みなさま方が何気に「私はとにかく目の前のこの人を助けたくて」とか「自分のマチをきれいにしたくて」とかいう自発的な思いから、喜んで何かをしようというウォロな思いから始まったものであっても、それが１人から２人、３人、５人、１０人、1万人、100万人とつながっていくと、ひょっとしたら社会を変えるかも知れない、ひょとしたら世の中を変えるかも知れない、ひょとしたらいろんな仕組みを変えるかも知れないという動きにつながる可能性があるということを心に留めておいていただきたいなと思うわけなんです。

現に、このわずか３年、５年の間でも変わったことは一杯あります。例えば、あしなが育英会という交通遺児を支えるところがあるんですが、あしなが育英会が支えている子どもたちというのは、交通遺児だけではありません。自殺をした親御さんの子どもも支えています。こういう子どもたちをどうやって救おうかということで、あるとき本が出版されました。その本が出版されたことを取材した、あるＮＨＫの記者がおりました。その記者がその後「ほっとけない」と思って、こういう子どもたちを生まないために、自殺というものを、つまり、失われなくてもいい命を、どうやって救っていくのか、いまや交通事故で亡くなる方は、1万人を切って何千人になりましたが、自殺で亡くなる方は年間３万人を超えてます。単純に３６５で割っていただければ、１日で何十人の方が無くなっているかということなんです。この瞬間もひょっとしたらと思うくらいのことなんです。そういう命をこれ以上亡くさないためにといって、運動を起こしたＮＰＯがあります、ライフリンクというところです。そこが、わずか２年あまりの活動、運動で多くの人たちの共感を経て、自殺対策基本法というのを２年前につくりあげました。これはすごい勢いでつくったんです。その代わり、それに関わっている人たちは壮絶な運動を起こしました。ほぼ同時に出来たのが、ガン対策基本法であります。昨年亡くなった山本孝史さんという参議院の議員さんがいたんですが、その方たちが中心となってつくった法律でもありました。事例を挙げればきりがないくらいに、一杯いろんな人たちの思いがつながっていって、「これはどうにかしないといけない」といって、動き出して、いろんなものが変わっていく可能性を持つということを、是非、今日、特にＮＰＯ法施行満１０年の年に当たるこの年に、私は強くお伝えしておきたいと思うわけなんですね。私もそういうところの現場も方とお話する機会がありまして、「あの時はこんなに大変だったけども、やっと日の目を見た」「今でこそ大変なんだけど、ひょっとしたら将来日の目を見るかもしれない」そういう可能性にかけながらみんなでやっていっているところがあります。

「共感」という言葉を遣わさせていただきました。共感は共に感じると書きます。これは人と人を結びつける連結器であります。共感があってこそ人と人は結びついていきます。そういう気持ちをどれだけみんなでつなぎあっていけるか、ここがこれからのまちづくりの、かなり大事な部分ではないだろうかなと考えるところがございます。さあ、そういう中で、共働の話を進めていきましょう。今や、「共働」「共働」と、どこの市町村も言っております。マスタープラン、いわゆる基本計画に書いてないところはないってくらいに、「共働」しよう「きょうどう」しよう「今日どう」しようというくらい、みんな使っている現状が実際にございます。私も、福岡市役所に行く前までは、それほど意識してなかったんですけども、市役所にいってかなり強く意識するようになりました。役所に行って、どうもみなさんが「共働」してるとか言っているシーンはどうも３つありそうだということがあったんです。それと同時に、福岡市役所に行ったときに、共働の文字が協力の協ではなく、共の字だというのに驚かされました。どうもちょっと調べてみるに、協力の協というのは、ちょっと怪しいんです。例えば、ＡさんがＢさんに協力のお願いをするんですね。で、ＢさんはＡさんに協力するんですよ。けど、そこで終わってしまうんです。協力の協は、お願いする側の都合が強く働いて、お願いした側は良かったんだけれども、された側は「で、何？」となりがち、下手をすれば縦の関係性になってしまう危険性をはらんでいる意味を持っているようです。ところが、共の字というのは、ＡさんとＢさんが横になって、双方向になっていくんです。共の字というのは、大事なものを両手で頭の上に架し上げるとか、バランスをとるという意味を持っているそうです。ですから、大事なものを人がやって

いくとお供えものになるというのは、そういう意味だそうでございます。ですから、福岡市が使っていたというのもありまして、私はこの共の字でお話を進めていきたいと思います。

その共働、中に入ってみて、いったいどんなシーンで使っているのかなということを感じて、大きく３つありました。それがお手許の資料でいくところの９ページの上側に書いているものです。まず、理念の共働というのがある､つまり総論賛成というやつですね。「筑後市を良いマチにしましょう」「住みよいマチにしましょう」とかいう、いろんな条例をつくったり、市民憲章をつくったり、スローガンつくったり、そういうものです。その次に組織の共働があるなと思ったんですね。例えばなんとか連絡協議会とかつくって、役所が半分で住民が半分、そういうものでございます。３つめ、これが一般的で簡単な話でありますが、実施の共働と私は呼んでますが、何かイベントやら、何かやるときに、例えば役所の人がテント立てて、地元の人が受付してとかいうふうに、いわゆる役割分担をしていく中で一緒にやっているという状況をつくるということであります。ところがですね、役所の中に入って思ったのが、理念とかいう、ひとつの大きな旗を立てて、実際に動く主体をつくって、実際に何をやりますとかいう計画を立てたり、実際の事業をやるというのがあるんですが、その途中途中の意思決定、つまり具体的に何します、何しますというのは、良いも悪いも含めて役所任せだったんです。全体の方向性というのは、市民の代表であるところの議会を通じて、そこで決まっているので、そういう意味での議会軽視ではないんですが、その後の話です。具体的に何するの、どうするの、という話のときに基本的に役所まかせであったり、住民がサボってたり、住民側が任せすぎてたり、住民ができてなかったり、役所が逆に張り切りすぎてたりとか、別に犯人探しをしてもしょうがない話でありますが、とにかくそういう状況があるなということに気がつかされました。ですから、そこのところに一緒にかんでいくという方法を考えなきゃいけないんじゃないかなと思い始めたのが、私の２００１年の秋口の話でありました。そして、それから「いったい共働って、いつの時代の、どの頃に出没してたんだろうか」ということで、ものの本を調べてみたり、読んでみたりしたらですね、さかのぼること、江戸時代まで行きました。市民と市民、あるいは住民と住民がお互いに助け合う関係性、これを民民関係と呼んでます。昔の、地域のコミュニティの作られ方というか、

できかたというのはですね、道があって向こう３軒両隣というのがひとつの単位でありました。つまり、前の前の、コミュニティの単位は道を挟んだ関係性、これを背割りと呼んでますが、こういう関係で一つの単位というのができておりました。今でもこれは残っております。例えば、まもなく始まります、博多の祇園山笠、あれのなんとか流とかありますが、あれは、道があって、その横に張り付いているひとたちでひとつの流を形成しています。土居流が非常に分かりやすいんですけれども、櫛田神社から北に土居通りというのがありまして、その両側に張り付いている形で、土居流というのを形成しています。今でも、大阪市と京都市の町会、町名、「なんとか何丁目」「なんとか町」とかつくときは、この道を間にした関係でいまだに残ってます。昔は、この道幅が狭く、子どもたちがここで遊んでいたら、全部目が届いてましたし、おかあちゃんたちがここにでてきたら、いきなりここに公民館ができました。つまり、今で言ったら、わざわざ公民館つくるとか、子育ての見守り活動とかは全て、ここに、わざわざやらなくても日常的に存在をしておりました。ところが､いろいろ区画整理とかあったりして、この道幅が広くなったんですね。都心部になってくると、マンションが建設され、お向かいさんが消えてなくなります。目の前に通路があるだけですね。そしてさらに、町会、町名のやり方は、道で囲まれた関係で基本的な単位をつるということが増えてまいりました。そして、こういう関係になっていくと、一生背中合わせの人たちが、基礎単位を組まなければいけないという状況が、今あるんですね。私は、これをちょっ

とずらすだけでも随分関係が変わるんじゃないかなというふうに思ったりなんかもします。だから、道をきれいにするとかいうのも、前は共有物としてやってたから「きれいにしよう」というのがあったんですが、今こういうふうにすると、ここの堺はどこや、向こうや、こっちや、という話になって、みんなが譲り合ったり、押し付けあったりしているという状況になっているんだなという話を聞いております。でも、昔はそういう形で、みなさんが一緒にやっておりました。みそ貸して、しょうゆ貸して、うちの子ども預かってなんていって、日常のお困りことは、ほとんど地元の民民の関係で成り立っていたわけです。今でこそ行政のお仕事になっているようなことも、かなりの部分で民間がやっていたこともありました。例えば、道をつくるということも道普請という言葉があるように、地域の人たちが一生懸命道をつくったということもありますし、橋をかけるとかいうのも、例えば大阪なんかは橋がつく地名が多いですね。心斎橋とか淀屋橋とかってありますが、淀屋橋というのは、淀屋さんが自分のお店の向こうに米市場があって、そこからスッと持ってくるために自分の店の前にかけた橋が淀屋橋というように自分たちでつくっていったというのがほとんどだったんです。そして、教育のシステムであるところの寺子屋の先生たちも、お寺の和尚さん中心に、民間の方たちが担い手でありました。今でいう消防のシステムも江戸八百八町のシステムは大岡忠行さんが言ったかも知れないけれども、実際の担い手は町火消しと言われる町人たちです。それが、今の消防団につながっていったというのがあります。そして、いわゆる農村とかになっていくと、地域によっては茅葺の屋根がつくられていて、吹き替えをやるときには、その家だけでは具合が悪いんで、みんなで地域の人が力を貸してやっていくという風に、「結」だとか「もやい」だとかという言い方ありますが、そういう民民の関係のことで大概のことは、お互いになんとか助けあってたんです。どうしてもそこではまかりならんということだけ、貨幣だとか、治安だとかというところを役所が担って、税金を受けてサービスをやる、そういう関係性がありました。

民民の関係は、確かにありがたい話ではあるんですけども、あくまで個人どうしの関係です。相手は自分のためだけに存在をしているわけではありませんから、いつもいつも頼むわけにはいかないんです。それに対して、行政というところは、いつも９時から５時まで、とりあえず電話はとってくれるなんていうのがあるんで、行政にお願いすることが増えていったんです。増えていったらどういうことになったかというと、「役所にやらせとけ」といって、ここのところ（民民の関係）がどんどん切れていきました。そうすると、ますますこちら側（行政）にお願いすることが増えてまいります。今、何かといえば役所に電話があります。例えば家の前にゴミが落ちてれば役所に電話、となりの柿木が延びてきても役所に電話というくらいに。「なんでこんなことしないといけないのか」と思いながらも出動となるわけです。市民から文句を言われたくないから、しょうがなく行っているという話しも無きにしもあらずです。で、ますますこちら（行政）が大きくなって、もうこれ以上まかないきれません、みんなのちからを借りたいという話になってきたわけです。で、あるとき、ここに新しい課題が生まれたとしましょう。行政もそれなりに頑張ってくれるところあります。ところが、さっきも言いましたように、大変みなさん方のご要望事項、ニーズが多様多彩になってきたから、全てのことに、かゆいところに手がとどかないんですよ。右手の親指を曲げたつもりが、左手の小指が曲がってたというくらいに、なかなか上手いことといかんというもどかしさを感じることもあるんです。でも、この人は困ってます、どうしようといったときに「ほっとけない」と声を上げてくれる人ができたんです。それがボランティア、ＮＰＯ、あるいはコミュニティ、地域の活動であります。ですから、私が思いますに、個人でやっているボランティア活動であれ、組織でのNPOであれ、地域でやっているコミュニティの活動であれ、昔あって、今ズタズタになっている、この民と民の関係性をもう一回結びなおす作業ではないかなというふうに考えています。で、役所もやろう、こっちもやろうとなったら一緒にやろうと考えるのは、非常に自然な流れとでもいいましょうか、そして、一緒にやろうやという話で「共働」というのが生まれてきたのではないかというふうに思うわけなんですね。このときに大事なのは、この共通の課題、もしくは、共通の目的なるものを持つということです。そして、この目的課題に対しては、この両者は双方向であって、そして対等であります。多少、実質的な力の強さの差はあったとしても、これを解決する、達成するためには、この２つはパートナーであります。で、これが一回解決されたら、一旦解散。また、何か新しい問題が生まれたら、組みましょうやという、そういう話であります。一番具合の悪いのは、ここ（住民側）無くして、ただ、ここ（企業）とこと（行政）が仲良くやりましょ

うといったら、下手すれば癒着になりますので、これはちょっと気をつけたほうがよろしゅうございますよということがあります。

行政側が気持ちの上であるのは、市民が市民を助ける、この力が強くなればなるほど、いらんことせんで済むじゃないですか、高いコスト払って。だから、ここが強くなって欲しいと思いがあるんですね。だから、ここを応援したいんです。けれども、あんたのとこだけとか、ここだけというわけにはいかないから、全体の底上げをして、やるという方法をとるんですね。例えば情報の提供とか場所の提供とか、機会、チャンスは均等にやるという形でやっていく、これを支援と呼んでます。全体を底上げするというためにやっていくという活動です。ただ、ここで絶対に勘違いしないで欲しいことがあるんです。補助金が一番分かりやすいんですけど、ここを底上げするために補助金を出します。その補助金は、ここの団体を太らせるためにやっているわけではありません。その先にあるこの力を強めんがために出してるわけであります。例えばこういうことです。福岡県の旧津屋崎町、今、福間と合併して福津市となりました。あの津屋崎町は、ご存知の方も多いかと思いますが、アカウミガメがあがってくるということで、大変有名になりました。おかげさまでボランティアも増えて、あちこちから寄附がくるようになったそうです。ボランティアが多すぎて、アカウミガメがあがりきらんかったという話もあるくらいに、大変にぎわってるそうですが、そのときに、全国から、アカウミガメを守る会、育てる会というところに寄附がやってきます。寄附をする方の気持ちは、そのアカウミガメを守る会、育てる会を太らせるために寄附をしているのではないんです。その先にいるアカウミガメのためにやっているんです。「良いことをやっている」じゃなくて、その先のことはちゃんとやってますかというところを確認しあうことが大事だろうと思います。これは、逆もしかりです。筑後市の市民が、市役所に住民税を納めているのは、筑後市役所を太らせるためにやっているわけではなくて、その先にあるサービスに対して期待をしているからです。そこのところはお互い様ですから、気をつけていきましょうというところでもあるわけです。こういう関係があるのではないかなと考えております。

そこで、「一緒にやりましょう」と言うのは簡単なんですが、「共働」ってどこから始めれば良いのですか、という話を必ずご質問なりでいただきます。これは非常に悩ましい話です。「共働」って、進める側は悩ましい話なんです。ページは次の10ページに移ります。「共働」というこの行為は、いきなり始まるものではありません。例えて言えばどういう段階かというと、物語で起承転結とありますが、起承転結でいうと「転」の部分です。「転」の部分をいきなり語り始めるようなものです。いきなり「共働しよう」と言うのは、桃太郎で言ったら、いきなり鬼が島の話を語り始めるようなものであり、見ず知らずの人から、いきなり道端で声をかけられて、「デートしましょう」とか「結婚しましょう」と言われるようなものですよ。そしたら必ずなんと答えるかというと「ちょっとまって、あんた誰？」、という話になるわけで、段取りが必要です。

私たちが一緒にやろうというときに、一番最初にやるべきことは何かというと、共有であります。平たくいえば「自己紹介」です。まず、お互いのことを知り合うこと、それは例えば、自分自身のことを知って欲しい、相手のことを知りたい、自分の団体がどんな活動をしているのかということを知って欲しい、自分の地域はどんな地域であるかということを知って欲しい。行政は自分たちがどんな事業や活動をしているかということを情報公開する、とかいうことを全部含めて、お互いのことを知り合うこと、これが「共有」であります。例えば、一丁目の太郎と三丁目の花子が出会ったとしたときには、まず「太郎でございます」「花子でございます」と名乗りあうところからスタートするわけなんですね。そうするとおしゃべりが始まってきます。太郎、花子で言えば、次に「ご趣味は」とくるんですね。「私は野球を見るのが好きです」「そうですか私も野球見るのが好きですよ、どこのファンですか」「福岡ソフトバンクホークス」「私もホークス」という感じに、話をしていくうちに共通点だとか、一致点だとかというものが生まれてきます。ここで生まれるのが何かというと「共感」です。さっきも言いましたが、「共感」というのは、人と人とを結びつける連結器であります。この気持ちがだんだん強まっていくと、運動性を帯びてくるんですね。地域の活動の中で「みんなで一緒にやろう」とかいうのは、大概「運動」というのがついているんです。「花いっぱい運動」「あいさつ運動」「オアシス運動」、「運動会」というのもありますね。「運動」と名のつくものはいろいろあって、あれはどういう意味を込めているかというと、みんなでこぞってやりましょうという意味なんです。おしゃべりをすると「共感」というのがくるんです。そうすると、「同じホークス！」となるから、次の話が早いんです。「じゃ、今度ヤフードームに行きませんか」

といって、デートは成立するわけです。やっと、たどりつきました。つまり、いきなり「共働」は始まりません。その前提が必要です。お互いのことを知り合って、おしゃべりをして、「あっ」というところを見つけるという、この「共有」して「共感」するというところを抜きにして、何かをやろうということは、まずもって無理です。

ところが、今はあまりにもスピードを求めすぎたり、あまりにも成果ばかり求めすぎて、ともすれば、いきなり「共働」をはじめようとします。でも、いきなり「共働」が始まるかといったら無理です。例えば、家の隣に新しい方が引っ越してきたとします。翌日「トントン」とドアをたたかれて、開けた瞬間に「明日の筑後市のために一緒に頑張りましょう」と手を出されたらどうします。まず「あんた誰」から始まって、「どこからきたのですか」「ご職業は」「ご家族は」「ご趣味は」と聞いていくうちに、「なんか悪い人じゃないから、今度清掃活動にさそおう」とかいう話になっていくんです。そこまでは、ちょっと時間がいるんです。そして、やっと一緒にやろうという話になるんです。地域が行政と、行政がNPOと、組み合わせはともかくとして、まず互いが知り合わないと、どうにもこうにもならないんですよ。ときどき、いきなりポンとできたように見えるものがあるんですが、それは、その前にお互いに知っている、だいたいお互いに具合が分かっているというように、やっぱり、こういう時間をどこかで持っているんです。例えば、みなさんが何かグループ作ります、勝手に人を選んで良いというときに、どういう人を選ぶかというと、自分が知っている人、自分のことを知ってくれている人、自分が好きな人、自分のことを好きだと思ってくれている人をだいたい選ぶんですよ。逆の自分が知らない人、自分のことを知らないひと、自分が嫌いな人、自分のことを嫌っている人をわざわざ選ぶことは無いんです。というくらいに、事を上手く進めようと思って、自分がやろうとなったら、このあたりができている人なんです。

「共」には、共に生きる共生、共に育む共育、共存もありますね、共栄もありますね、共鳴というのもありますね、共同というのもありますね、というくらいに、「共」の字を使うことは山のようにあるんですよ。今、あちこちで「共に」と言っています。企業は「お客様と共に」、行政は「市民と共に」、議員さんは「地域のみなさまと共に」と、いろいろ「共に」と書くんですよ。もし、お暇であれば、新聞広告を見ていただいたら、「共に」という言葉を使っているキャッチフレーズや文章が山のように出ています。それくらい一緒にやらなければ、とか、一緒にやっている状況がとても良いと思っているみたいです。ということは、裏を返せば、みんなバラバラだということなんです。そういうことでもあるんです。今、西日本新聞の地域再生小委員会、西日本フォーラム２１というシンクタンクみたいなところがあって、そこの委員をやらせてもらっています。何を取り上げているかというと、主に限界集落です。私が委員になって、いろいろな記者のメモを読ませていただいて、いろんな現場の話を伺って、「あっ」と息を呑む話があったのが、限界集落という言葉は、今特に国土交通省などが使っている使い回しを見ると、どうも中山間地だとか農山村漁村だとか、離島半島などに言われる、いわゆる田舎を象徴する言葉として使われているみたいなんですが、そうではないということが分かりました。限界集落というのは、都会の真ん中であろうと、どこであろうとも存在するということです。例えば、福岡市の大名、人が一杯通っているところです。あういうところでも、３年前の福岡県西方沖地震があったときに、ビルが傾いたとか、アパートが具合悪くなったといって、引っ越した方が一杯いるんです。どうしても行き先がないとか、ここから動きたくないとかで、例えば、１０戸のアパートに１人暮らしのおじいちゃん、おばあちゃんが１人か２人いることがあるんです。たまに、民生委員が来たときに、「えっ」というような状況があるそうです。ほんの１０メートルか２０メートル先にはいっぱい人が通って人の目がたくさんあるようなところでも、人との関係が切れた瞬間に限界集落化するんですね。ベッドタウンもそうです。そして、逆に人との関係が残っていたら、どんな山の中であろうと元気なんですよ。例えば、山の中に１人暮らししているおばあちゃんが、「私はインターネットで毎日孫と話をしている」と、とても元気なんですよ、繋がっていること、自分が生きていること、生かされていることが分かっているから。ということは、これもまた逆に返すと、人とのつながりが切れているという状況が見えたときには、それは、たとえ都会のど真ん中であろうと、東京のど真ん中であろうと、職場であろうと、地域であろうと、家庭であろうと、限界集落は存在するんですね。「私は我が家で限界集落化していないか」とドキッとした方もいるかもしれませんが、そういうようなことはあるということなんですね。つまり、今からは本当に一緒にというのは、多分隠れている気持ちとしては、つながりを求めているんだと思います。

今、となりの者同士でもメールでやり取りをし、会えば良いのに携帯で連絡をとり、会って話せばたいしたことないのに、メール送るんですよ。おしゃべりをしていないんです。今、雑談という言葉は絶滅危惧種になってしまいました。私はそう思っています。今、例えば企業なんかで、一番濃い関係性が残っているのはどこかというと、喫煙ルームです。あそこが一番濃い関係があるんですよ。部屋に戻ったら、みんな個人事業主のようにおしゃべりしないんですよ。だから、そのおしゃべりをしたくて、やめていたタバコをまた、吸い始めたという人もいるくらいなんです。それくらい、つながりというものが大事なんだろうというふうに思っております。

「共働」という言葉は「きょうどう」と読むから難しいです。「ともばたらき」と呼んだ瞬間に、一気にみなさま方の身近な言葉になるわけです。共働きとは、どんなときにやっているでしょうか。ちゃんと自立した二人が、それぞれに頑張っていて、ちゃんと目的があって共働きするんです。例えば、子どもを育てるためとか、ローンの返済をしようとか、いろいろありますよ。そして、まだ小さい子どもがいたとした場合に、毎日送り迎えしなければならない、そのときに毎朝交わされる会話は「今日は、遅い？」「ちょっと今日は遅くなる」「じゃ、自分が迎えにいく」といって、子どもが無事に帰ってくるわけです。わずか 10 秒くらいの会話でありますが、その中に、今日のお互いの状況を把握し、「しょうがないな」と言いながら共感して、ということを実は無意識のうちに織り成しているわけですね。「共働」は、これを他人としなければならないので、少し意識してやりましょうということであろうかというふうに思います。

そのときに、私たちはちょっと考えなければいけないことがあるんです。それは何かというと、どんなコミュニケーションを、日頃やってしまっているかということなんです。私たちは日頃、思いを持って、それを言葉にし、そして、行動があって、何かの形をつくっていくというのがあるんですね。願わくば、思いが言葉になり、言葉が行動につながり、それが良い形を生んでくれれば良いんですけども、実際のところはどうかというと、思うほど言葉に出せず、行動に結びつかず、変なものをつくってしまったという状況が非常に多い。で、「思い」は見えませんから、夫婦の間でも良くありますが「言わなければ分からない」ということなんです。行動とか形というのは結果です。ですから、どうも私たちが勝負を出来るのは、ここです。平たく言えばおしゃべりすることです。この 4 つのことに対してのアプローチの仕方が微妙に違いまして、役所はどこから入るかというと、まず形から入ろうとするんです。まず協議会をつくるとかですね。地域住民はどこから入るかというと、思いから入ってくるんです。スタートラインは違っても、最後にせめぎあうのは、言葉なんです。お互いにお話をすることなんです。ある方はこんなことを言いました。これまでのマチづくりは、ものづくりでしたと。例えば橋をかけるだとか、公民館を建てるだとか、そういうことだったんですが、これからは物語づくりだと言ってます。筑後市をどんなマチにするんだということのストーリーを、どうやってお互いに描いていくかといくことです。物

づくりと物語づくりの決定的な差は、この語りであります、それはイコールおしゃべりです。どうやってみんなで、どうする、といったことをもっとおしゃべりをする必要があるんではないかなと、こういうふうに思うわけです。ところが、なかなか難しいんですよ。「出てこない」とかいろいろあり、なかなか難しいということも伺ってます。でも、そう言いながらも、「出てくる」「出てこない」というシーンというのは結構分かりやすくて、食べ物があるときです。不思議ですね。豚汁をやったとたんに「この人はどこの人」という人が出てきたりする、こういうことが、まだあるので、やっぱり人間という動物の分かりやすいところを、もう一回考えてみる必要もあるのかなと思ったりもいたします。それでは、いよいよ、最後の 10 ページのところを少しお話をさせていただいて、おしまいとしたいと思います。

こういうふうに一緒にやるってことは、いろいろ大変なこともあるんですが、さらに、みなさま方が活動されていたり、日頃暮らされている地域というところにおいては、どんなことが織り成されているかということを、簡単に考えてみたいと思います。一つは、いわゆる地域で、町内会とか自治会とかに代表される地縁組織の方たち、みなさま方でいうと行政区の中で、献血のことから、じいちゃん、ばあちゃんのことから、子どもたちのことから、人権から男女共同参画までいろいろやってますよといって、地域に這い蹲りながら頑張っている方たちのことを、法政大学の田村明先生は「土の人」と呼んでます。そして、ボランティアだとか NPO に代表されるように、テーマ、例えば、環境とか子育てとかあるんですが、場所は、今日はサザンクス筑後、次は公民館とか、ぷらぷらしながら、いろんな活動をされている方たちのことを「風の人」と呼んでます。できれば、この両者があいまって、新しい「風土」をつくって欲しいというのが田村先生のものの言い方なんですが、よくよく考えて見ますと、ボランティアや NPO でテーマを持って動いてる方たちは、結局、誰のために、どこのために活動されているかというと、ほとんど地元のためです。例えば、筑後で活動されているボランティアグループがあったとします。その方たちのご住所を伺ったとします。そしたら、ほぼ間違いなく、筑後市内かせいぜいこの周辺の筑後エリアの人たちですよ。もし、筑後市で活動されているグループがあって、半分以上が札幌の人とかいうような団体があったら、一度お会いしてみたいと思うくらいに、全国組織みたいなものではない限り、まず無いんです。つまり、どういうことかというと、そのサービスの提供側というか担い手も、サービスを受ける側も、みんな地元の者同士なんです。ですから、私は、このボランティア、NPO は、風のようなんだけど、最後は土に返るんだろうと思っています。ですから、できれば活動されている方も、やっぱり地元、巷から愛されるような状況であって欲しいなということは切に願うところでもあります。

そして、こういう、多少立場が違っても、最後は土に返るということがはっきり見えなくても、どうも私たちは、あることを通じて考えれば、一緒にやるということは、昔からやっていたようです。それは何かというと祭りです。祭りというのは、氏神さんがいて、氏神さんに氏子たちが心寄せ合う姿というのが、もともとの原点だそうです。そして、氏子たちが楽しそうにやっている姿を見て「仲間にいれて」と村人たちが寄ってくる、これが全部総称して「村の鎮守の神様の・・・」というお祭りになってくるわけです。お手許の 10 ページの下のところにありますように、この氏神、氏子、村人、祭りと書いているとことに、今風の言葉を当てはめるとこういうふうになります。例えば、氏神のとことには、目的だとか、ミッションだとか、コンセプトだとか、そういうのが入ってきます。氏子のところには、役員、会員、スタッフ、そういう人たちなんです。そして、村人のところには、市民、住民、ゲスト、そういうのが入ってくるんです。そして、この祭りはときにイベントになり、ときに NPO になっていくということなんです。ということはどういうことか、私たちが心を寄せ合う原点になっている、この氏神さんにあたるようなものは、結局何かということなんです。多分いろいろな活動のやり方とか、長いとか、短いとか、分野とか地域とか、いろんな考え方、やり方の違いがあったとしても、最後の最後、行き着く先は、この筑後を良いマチにしたいだと思います。だから、この氏神探しをすることが、今から大事なんだろうな、いろいろやり方の差はあるんだけれども、一緒に何かをやるというときには、最後の上位概念的なところで、「結局このためにやってるんでしょ」と、わざわざ言うことが大事なんです。リアルに確かめることなんです、目の前で確かめることが大事なんです、これが今から必要なんです。さんざんコミュニティと言ってきましたが、外からくる方にとってみれば、地域に出会うというのは、とてもどきどきするところがあって、そういう方たちに、私は、地域に入るときには、３つのことを知る必要があると言ってます。一つは人

を知るということです。誰がいるか、もっと別の言い方をすると、誰にあいさつしにいったら良いかという話も含めて、人を知るということです。２つめは歴史、あるいは経緯を知るということです。「ここではこんなことをやるんだ」とか「ここではこんなことをやってはいけない」とかいうことは、必ず歴史経緯があるんです。いわく因縁故事来歴みたいなことがあります。３つめは単純なことですが、非常に重要です。今日も、司会をされていた方はどきどきされていたと思うんですが、地理（地名）を知るということで、人の名前を間違えるのと同じことですから、なかなか大変なことなんです。ですから、こういうことを、単純にやっていくこと、そして、どの地域に川があるとか、どこに何があるとかいうことを単純に知っていくこと、つまり、単純に共有していくことが、受け入れられる立場になるときの、最初の出発点になろうと思うんです。

で、このコミュニティ、この言葉の中にも、原点には「共」の字が実はあります。コミュニティとは、もとはコミュネーレというラテン語があるんです。その深い意味は、共に重荷を担い合うという意味です。ですから、問題は大変なんだけど、みんなで分け合って、担いあっていけば、ちょうどお神輿をみんなで担いでいくかのように、みんなで担い合っていけば、浮くし、前にいけるだろう、そういう発想であります。そして、この「共」の字はいたるところにちりばめられてます。今日は手話通訳の方にきていただいてます。ボランティアというのを手話でお願いしたいのですが。これなんです。二人の人が同じ方向を向いて、共に寄り添いながら歩いていく姿、これがボランティアなんですね。この組み合わせは、おじいちゃんおばあちゃんと子どもたちかもしれない、健常者と障害者かもしれない、男性と女性かもしれない、あるいは、行政と地域住民の方かも知れません。組み合わせはともかく、同じ方向を向いて、寄り添いながら歩いていく姿、これでボランティアと訳していることに込めている意味を、是非、心に留めておいていただきたいなと思うんです。

そしてもう一つ、たとえ行政であれ、地域住民の立場であれ、NPO であれ、ボランティアであれ、あるいは企業であれ、立場とかいろんな特性の違いがあったとしても、共に手を取り合って、同じ方向を向いて、戦うべき共通の敵がひとつあります。それは何かというと、「無関心」です。例えば、ポイ捨てをする人がいる、その人たちに対して関心を呼び起こすために、行政がポスターを作って啓発をする、地域の方たちは美化活動をする、NPO は何かイベントを起こす、やり方はそれぞれに違うんだけれども、その無関心層に対して、「何とか一緒にやらんか」と、みんなで一緒に戦っている仲間なんです。で、マザーテレサも言ってます「愛の反対は、憎悪でなく無関心だ」と。この無関心層というのは、どういうところに存在するか、人間というのはおもしろいもので、１０人寄れば、2:6:2といいまして、すごいのが２人、とんでもないのが２人、まあまあが６人となるんですよ。だから、すごく関心持っていろんなことやることに対して、「いいぞ、やれやれ」と言ってくれる人が２割、反対する人も２割いるんです。反対してくれる分は良いんです、関心持ってくれている証拠ですから。問題は真ん中の６なんですよ。ここをどうやって呼び覚ますかなんです。で、ここの半分をとったら過半数ですから、ここをどうやるか、その為にみなさんいろんな努力をされているんです。地域住民に対して声かけをする、何か催しをする、お祭りをする、いろんなことをやっておられるんです。

そうなってくると必ず出てくるのが、ネットワークをつくろうという話なんですが、これは、是非気をつけていただきたいんです。ネットワークという言葉は、怪しいんです。ネットとワークを分けて考えたほうがよろしゅうございます。集まってくださったみなさまの名簿を作ったら、これでネットはできるんです。ところが、みなさんが忙しいなかで集まっても、「今日は何するの」とワークがないことが多いんですよ。だから、是非お勧めしたいのは、最初にワークを見つけましょう。つまり、今の筑後市にとって何が必要で、何が課題か、そして、それを解決するために、どこと組むか、誰と組むかということを考えてネットをはっていただきたいと思います。場合によっては、自分の行政区だけで無理だと思ったら隣と組む。自分の小学校区でだめだったら、隣の校区と組む、筑後市全体で組んでもだめだったら、隣のいろんなところと組む、なんてこともあるかも知れません。県内で無理だったら、佐賀とか大分とかもあるかも知れません。日本でだめだったらアメリカというのもあるかも知れません。とにかく、そういうことを実現するために、誰がここに居てくれたらいいのか、そういうことを考えていただきたいと思います。そのときに、みなさん方も日常でさまざまな活動をされていらっしゃいますので、相当いろいろな方と出会われていると思います。でも、全員と出会っているわけではない。つまり出会いきれているわけではないです。市長さんも、全部の

市民の方と握手をしたわけではありません。ですから、出会っているつもりでも、出会いきれていない、まだまだ、筑後市にはいろんなことができて、いろんなことに関心を持って、いろんなことをやってみたいと思っている方が、まだいらっしゃるんではないかと思います。どうやって、その自発性を誘発できるかというのは、多分みなさま方が地道に取り組んでいる活動、あるいは、地道に取り組んでいる姿そのものなんだろうと思ってます。

私もこの世界にはいって、特に大分の一村一品運動には、大変大きな影響を受けました。当時の、大分県知事であった平松守彦さんが、こんなことを言ってくれました。「加留部さん、出会うことも大事、何よりも交流することが大事です。だけど、交流は掛け算です」と言われました。「どういうことですか？」と言ったら、「１の人と１の人が会ったら１だが、２の人と会ったら２になれるかも知れない」「2 同士は 4 かも知れないという可能性があります。相手を間違って 0.8 の人と交流したら、0.8 になって、0.8 同士は 0.64 で落ちます」と言われたんですね。平松さんは何が言いたかったというと、その人がどうのこうのという問題ではなくて、自分に無いもの、自分より良いものに出会いなさいということでした。そして、さらに、「最初は掛ける立場にありますので、どういう良い人に出会っていくか、良いものに出会うかというこが大事だから、掛ける立場は良いんだ」「そのうち年数が経っていくと、掛ける立場から、掛けられる立場に変わっていきます、そのときに、できれば 1 を割らないようにしないといけない」と言われました。「１割らないようにするには、どんな方法があるんですか」と聞いたら「方法は一つ、自分の中で足し算をします」と言われたんです。だから、例えばいろんな研修会だとか、いろんな人とおしゃべりをするとか、やり方はいろいろあるのでしょうが、やはり、学ぶということ、学ぶ姿勢というところが、どうも必要のようです。それは、いろんな筑後市の施策の中では、生涯学習であったりとか、地域での公民館活動であったりとか、さまざまな活動でもあるんでしょうが、多分、みなさま方の周りにある一つ一つ、そういうものが形成されていって、現在の姿、あるいは、現在の実績、そして、現在の筑後市の姿があるんではないかと思います。多分、ほっといたら、これは落ちてしまいます。だからといって、ずっと頑張り続けることも、ちょとしんどいです。そのときに仲間が必要なんです。もし、この会場で、まだ 1 歩踏み出せてなかったという方がいらっしゃったら、よければ、ちょっとしたことでも結構ですから、お仲間に加わっていただきたい、そして、私も、できることは限られているかと思いますが、実は、筑後市、今回で３回目なんです。前２回は男女共同参画のことの話をさせていただきに、地区の公民館を回らせていただきました、３回目でございますが、また、何か、こういうお話でもよければ、あるいは、もうちょっと別のことで矢面にたつことでも、外の人間をいれたほうが良いとかいうのがあれば、そんなことでも結構でございますので、機会、チャンスがあればなというふうに思っていることろでございます。

そんなところでだいたい時間となってしまいました。私、大変早口になってしまって申し訳ございません。でも、これは、お伝えしたいことがいっぱいあったんです。ということをご了解していただくということにさせていただきまして、この場をしめさせていただきます。どうも、みなさんありがとうございました。